文京学院大学人間学部研究紀要 Vol.14, pp.147 ～ 160, 2013.3

大学生における親孝行とその影響要因の日中比較

賀　蕾*・永久ひさ子**

親孝行は子から親への資源の還流であり，そのあり方は社会的状況や親孝行の価値観により変化する．親の期待に対して，農業中心の国の子どもは「経済的・実用的」な親孝行を実現しようとし，工業化が進んだ国の子どもは「心理的・精神的」な親孝行を実現しようとすると考えられる．日中両国の産業構造から見ると，進展の段階の違いがあり，日中大学生が育った時期の文化的背景の違いがあり，親孝行に違いがあることが予測できる．また，社会的状況や伝統的文化以外に，実際に親孝行を実行する人の親子関係や親に対する感謝の気持ちなど個人レベルによっても違いがあると思う．本研究では，大学生における親孝行とその影響要因の日中間の違いを検討した．そこで，日本の大学生における親への支援行動は個人がどのような親孝行観を持っているのかに左右されるのに対し，中国では伝統的文化と関連することが示唆された．

Key Words 親孝行，影響要因，日中比較，大学生

問題と目的

本研究は，日中両国の大学生における親孝行の異同点およびそれがどのような要因と関連するかを明らかにすることを目的にする．

Kağitçibaşi（1989）が提出し，柏木による補正・補足した社会変動－家族－個人の発達モデル（柏木，2003）から見ると，親が子どもに期待する価値には経済的価値と精神的価値があり，工業化の進展は子どもに期待する価値を変化させている（図 1）．農業中心の社会では，親は老後の経済を子どもに頼らざるをえない現実があるため子どもに「経済的・実用的価値」を期待し，工業化の進展した社会では，老後の経済を子どもに依存する必要が小さいため，生きがいやにぎやかさなど「心理的・精神的価値」を期待する（柏木，2010）．

＊日本エマージェンシーアシスタント株式会社
＊＊人間学部心理学科

親孝行は子から親への資源の還流であり，そのあり方は社会的状況や親孝行を徳とも美ともする価値観などによって変化する（柏木，2003）．親の期待に対して，農業中心の国の子どもは「経済的・実用的」な親孝行を実現しようとし，工業化が進んだ国の子どもは「心理的・精神的」な親孝行を実現しようとすると考えられる．

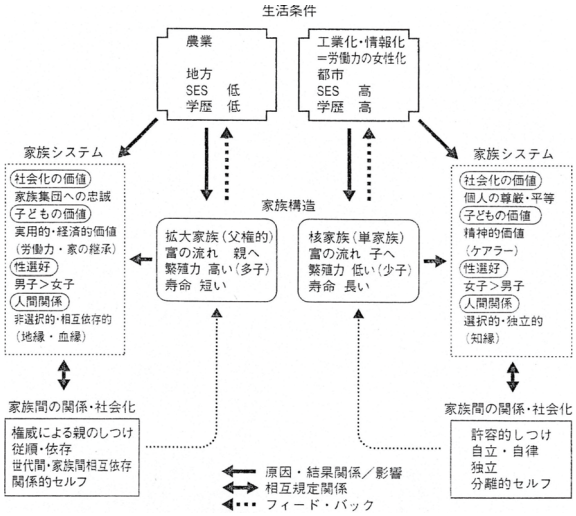

図 1 社会変動－家族－個人の発達モデル
（Kağitçibaşi 1989. 柏木による補正・補足 2003）

日本と中国の産業構造の変化を見ると，その高度成長化の方向はきわめて類似しているが，進展の段階の違いがある．日本の工業化は 60 年代後半から始まり，社会環境の変化に伴い，80 年代後半以後，老親扶養意識が消極的になった（毎日新聞社人口問題調査会，2000）．つまり，日本の現在の大学生は，生まれた時点から工業中心の社会であり，しかも老親扶養に対して消極的な文化の中で育ったと言える．一方，中国の工業化は 90 年代前半から始まり，2000 年前後の工業化の進展と同時に，政府は孝を主張するイベントなどのキャンペーンを行っている．つまり，中国の現在の大学生は小学校の時期から“孝”を強調する文化の中で育ったと言える．以上のような，日中大学生が育った時期の文化的背景の違いは，親孝行に違いがあることを予測させる．

親孝行の先行研究をみると，日本では心理学領域の研究は少なく，社会学や福祉学領域では“子との同居が高齢者虐待の発生要因となる（萩原，2009）”や“老親扶養について，福祉施設の整備に伴い，家庭介護から社会介護に変化する傾向である（酒向，1994）”または“大学生は現実的に老親扶養に直面していない（増本ら，2001）”など親孝行が消極的になっていることが指摘されていた．一方，中国では，社会学や人文科学の領域で孝文化に関する研究が多く，「孝」は伝統文化の中で最も重要な文化であること（楊，2006）が指摘され，また心理学領域では“伝統的孝文化の影響で，中国の高齢者に対しての最も多くのソーシャルサポートは家族からのサポートである（厳ら，2005）”，“青少年は伝統的孝道が現在でも存在する価値がある

と考え，老親扶養を必ず実現しようとする傾向がある（張・張，2004）”など親孝行が積極的であることが指摘されていた．そこで，本研究は日中間の親孝行の異同点について検討する．

また，中国の研究の中で，楊（1984）は社会心理学の視点から，親孝行は子どもの親孝行に対する態度（どのような事を親孝行と考えるか）と親孝行の行為（実際に行う行動）の 2 つの部分から成っていると述べている．つまり，親孝行は親孝行観と親への支援行動の 2 つの部分に分けられると考えられる．実際に，現実の経済的事情や親と住む距離などにより，親孝行をしたくてもできない場合があり，親孝行観と親への支援行動は必ずしも一致するとは限らない．そこで，本研究では親孝行を親孝行観と親への支援行動に分けて検討することにした．

動機づけや感情など人のもつ様々な心のプロセスとは，人がそこにある文化的慣習や集合的意味の体系に沿って反応し，その枠組みのなかで行動することを通じて作り出され，同時に，文化は，心により維持・変容されることにより将来へと受け継がれていく（北山，1997）．“孝”に関する伝統的文化は，中国の生活にありふれたものであり，家族間の行動の根拠は孝にあると考えられる．一方日本では，孝に関する伝統的文化や文化的慣習が少ないことから，孝以外のものが日本の家族間の行動の根拠となっていると考えられる．

自分と親との関係を一体と捉えるか個人と個人と捉えるかは，文化によって異なると考えられる．文化的自己観は，ある文化において歴史的に作り出され，暗黙に共有されている自己についての前提や通念である（北山，1998）．Markus & Kitayama（1991）は，それを西欧とりわけ北米中産階級に典型的である相互独立的自己観と日本を含むアジアの文化において一般的である相互協調的自己観の 2 つに大別している．しかしながら，日本を含むアジアの中でも，社会経済的進展の段階には違いがあることから，相互協調的自己観の強さにも違いがあると考えられる．このことから，他者と結びついた人間関係の一部として自己を捉える一体感は，社会経済的進展の段階が遅い中国の方が強いことが予測できる．

前述のとおり，親孝行は社会経済的進展や伝統的文化などによって規定されると考えられるが，それだけでなく，実際に親孝行を実行する人の親子関係や親に対する感謝の気持ちなど個人レベルによっても違いがあるだろう．

親への支援行動は親への感謝の気持ちを行動で示すことといえる．この支援行動は，親子間のコミュニケーションの良し悪しなどに影響を受けているとの指摘がある（永田ら，2007）．このことから，親子関係や親に対する感謝の気持ちなど個人レベルの状況と親孝行との関連についても検討する必要があると考えられる．

青年期は家族関係が大きく変化する時期である（落合ら，1996；小高，1998；池田ら，2006；小高，2008）．青年期は「依存への反省が加わり，親密感を増し，感謝の気持も加味される（西平，1990）」という特徴がある．また池田によれば（2006），大学生は高校生と比べて，親への感謝の心理状態が安定している．

本研究では，以上のことから，大学生における親への支援行動と親孝行およびそれらの日中間の違いを明らかにし，また親への支援行動がどのような要因と関連するかを検討することを

目的とする．具体的には，“伝統的文化への接触”“家族の一体感”“親への感謝の気持ち”“親子関係”との関連をみる．

方　法

2010 年 10 月，日中大学生（中国 31 人，日本 33 人）を対象に，自由記述の予備調査を行い，その結果に基づき質問紙を作成した．

質問紙は以下の 7 つの部分から構成した．①親に感謝する気持ちに関する項目：永田ら（2007）による“母と娘の絆”尺度の第一因子“感謝の念”を参考に，“母親”を“親”に修正して 7 項目を作成し，「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」の 5 件法で回答を求めた．②親子関係に関する項目：若原（2003）が作成した“親子関係尺度”の親への態度尺度から，「父親への愛情」因子と「母親への愛情」因子の中で，尺度に共有する 3 項目を選び，“父親”や“母親”を“親”に修正して使用し，「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」の 5 件法で回答を求めた．③親への支援行動に関する項目：日中大学生の将来の親への支援行動についての自由記述に基づき，35 項目を作成し，「全くやらないと思う」から「よくやると思う」の 4 件法で回答を求めた．④親孝行観に関する項目：日中大学生の親孝行観の自由記述に基づき，40 項目を作成し，「とても親不孝と思う」（1 点），「やや親不孝と思う」（2 点），「どちらとも言えない」（3 点），「やや親孝行と思う」（4 点），「とても親孝行と思う」（5 点）の 5 件法で回答求めた．⑤伝統的文化への接触頻度に関する項目：日中に共通する祝祭日や年中行事を行う頻度を質問する 10 項目を作成し，「全くない」から「よくある」の 4 件法で回答を求めた．⑥家族の一体感に関する項目：木内（1995）が作成した“相互独立・相互協調的自己観尺度”を参考に，家族関係と関係がある 10 項目を選び，“まわりの人”を“家族”に修正して作成し，「A にぴったりと当てはまる」（1 点），「どちらかといえば A」（2 点），「どちらかといえば B」（3 点），「B にぴったりと当てはまる」（4 点）の 4 件法で回答を求めた．⑦基本属性：性別，年齢，出身地，家族構成，居住状況，親の職業など個人情報について質問した．

2011 年 3 月から 5 月にかけて，日中の大学生を対象に，質問紙調査を行った．回収率は中国 97.5％と日本 97.7％で，有効回収数は中国 352 人と日本 256 人だった．

統計の検討には，IBM SPSS Statistics 18.0 を用いた．

結果と考察

1．親への支援行動尺度

親への支援行動 35 項目に対して因子分析（主因子法・Promax 回転）を行い，解釈可能な 5 因子を抽出した（表 1）．第 1 因子は経済的支援が中心であることから，「経済的支援行動」と命名した．第 2 因子は家族の関係を円滑にするという内容が中心であることから，「家族の絆

表1 親への支援行動のプロマックス回転後の因子パターン行列

	F1	F2	F3	F4	F5
QⅢ25.親が金銭面で困ってなくても、自分のできる範囲で、できるだけ多くお金をあげる	0.96	-0.07	-0.04	0.03	-0.05
QⅢ13.親にちょっと高い洋服などを買ってあげる	0.93	0.00	-0.08	0.13	-0.12
QⅢ24.仕送りする	0.89	-0.08	-0.06	0.00	0.07
QⅢ14.親に手頃な値段の日用品を買ってあげる	0.85	0.14	-0.07	-0.02	-0.08
QⅢ12.親に家電製品を買ってあげる	0.83	0.10	0.01	0.11	-0.19
QⅢ27.今より豊かな生活をさせてあげる	0.72	0.06	-0.01	0.12	0.08
QⅢ23.お金を出して、旅行をさせてあげる	0.65	-0.14	0.22	-0.04	0.15
QⅢ26.親が金銭面で困るようなことがあれば、援助する	0.56	0.29	-0.08	-0.13	0.14
QⅢ21.年末のボーナスの20%は親にあげる	0.52	-0.06	0.25	0.15	0.01
QⅢ32.孫を見せてあげる	-0.08	0.99	-0.07	0.13	-0.25
QⅢ31.将来、妻または夫になる人が自分の親と仲良くなるように仲介する	-0.06	0.88	0.06	0.02	-0.04
QⅢ30.円満な家庭を持つ	-0.04	0.84	-0.14	0.17	-0.04
QⅢ33.自分が幸せになる	-0.04	0.74	-0.19	0.08	0.17
QⅢ34.悩みごとや相談ごとを聴いてあげる	0.07	0.61	0.21	-0.18	0.10
QⅢ28.親をがっかりさせないように生きていく	0.06	0.54	-0.07	0.07	0.21
QⅢ35.困った時、辛い時に、一緒にいてあげる	0.14	0.52	0.32	-0.17	0.02
QⅢ1.親を尊敬する	0.27	0.48	0.12	0.04	-0.04
QⅢ10.親と一緒に住む	-0.08	-0.12	0.86	0.13	-0.10
QⅢ11.親と一緒に住むマンションを買ってあげる	0.29	-0.11	0.58	0.25	-0.23
QⅢ9.親と別居している場合、親と一緒に食事する	0.26	0.10	0.48	0.01	0.04
QⅢ22.仕事を持っても、年中二回ぐらい旅行に連れて行く、一緒に楽しい思い出を作る	0.35	-0.11	0.46	-0.01	0.14
QⅢ8.頻繁に実家に帰る	0.24	0.30	0.41	-0.07	0.02
QⅢ2.小さい頃、親から言われてやって欲しいことを実行する	-0.21	0.23	0.40	0.25	0.04
QⅢ7.親のことを気遣い、よく親と連絡する	0.18	0.36	0.38	-0.17	0.11
QⅢ4.出世する	0.07	0.08	0.09	0.73	0.12
QⅢ3.大金を稼ぐ	0.15	0.04	0.07	0.68	0.06
QⅢ5.いい会社に入る	0.24	0.10	0.11	0.55	0.03
QⅢ16.日々頑張る	-0.21	-0.07	0.07	0.11	0.79
QⅢ15.自立する	0.21	0.05	-0.28	0.07	0.61
QⅢ17.学業や職業などで、成功する	-0.05	0.02	0.04	0.47	0.49

因子間相関	F1	F2	F3	F4
F2	0.71			
F3	0.74	0.62		
F4	0.51	0.37	0.31	
F5	0.54	0.64	0.43	0.35

F1：経済的支援行動（α＝.95）　F2：家族の絆を強める(α=.92)　F3：親との時間の共有(α＝.87)
F4：親の面子を立てる（α＝.91）　F5：一人前になる（α＝.73）

を強める」と命名した．第3因子は親と共に過ごす時間を作ることが中心的内容であったので，「親との時間の共有」と命名した．第4因子は子ども自身の成功を親への支援と考えることであることから，「親の面子を立てる」と命名した．第5因子は子ども自身の自立を支援行動と考えることから，「一人前になる」と命名した．

このうち，F1は親に経済的面からの支援を行う因子，F2とF3は親に精神的面からの支援

を行う因子, F4 と F5 は自分自身の成長や成功によって親に安心させ喜ばせる支援を行う因子, という 3 側面に分かれる．従来の研究（細江，1987；太田ら，2002；尹ら，2009）と比べ，“経済的支援”や“精神的支援”以外に“自分自身の成長や成功”という新しい視点を加えることができた.

日中間の差及び性差を検討するため 2 要因分散分析を行い，交互作用のあったものには下位検定を行った（表 2，表 3).「経済的支援行動」については，国と性別の主効果が認められ，中国は日本より，女性は男性より得点が有意に高かった.「家族の絆を強める」と「親との時間の共有」については，有意な交互作用が認められた．単純主効果を分析したところ，国の要因は，男女ともに有意であり，中国が日本よりも得点が高かった．性別の要因は，日本で有意であり，女性は男性よりも得点が高かった.「親の面子を立てる」と「一人前になる」については，国の主効果が認められ，中国は日本より得点が有意に高かった.

表2 親への支援行動の基本統計量および2要因分散分析の結果

		性別			F値(1，604)		
従属変数	国籍	男女	男性	女性	国	性別	交互作用
経済的支援行動	中国	3.81(.24)	3.76(.28)	3.84(.21)	1137.50***	11.58**	0.93
	日本	2.69(.53)	2.59(.61)	2.74(.48)			
家族の絆を強める	中国	3.92(.18)	3.88(.23)	3.94(.14)	345.92***	13.81***	4.06*
	日本	3.32(.56)	3.19(.67)	3.38(.50)			
親との時間の共有	中国	3.47(.34)	3.42(.37)	3.50(.32)	488.86***	17.90***	4.89*
	日本	2.65(.57)	2.47(.63)	2.72(.53)			
親の面子を立てる	中国	3.60(.46)	3.59(.52)	3.61(.43)	417.16***	0.74	1.8
	日本	2.63(.62)	2.70(.74)	2.59(.56)			
一人前になる	中国	3.80(.34)	3.74(.40)	3.82(.30)	109.23***	2.17	0.81
	日本	3.41(.49)	3.40(.52)	3.42(.47)			

( )内はSD　　* p<.05　** p<.01　*** p<.001

表3 交互作用が有意であったものの下位検定結果

	国要因F(1，604)		性別要因F(1，604)	
従属変数	男性	女性	中国	日本
家族の絆を強める	159.82***	205.05***	1.80	13.72***
親との時間の共有	222.50***	295.20***	2.54	17.34***

( )内はSD　　*** p<.001

上述のように，中国の大学生は，将来的にこれらの親孝行をしたいとより強く考えており，これは中国の親孝行に関する教育の強さや親からの期待，モデルになる周囲の人の行動などの影響と考えられる．また，同じ国の中で，尺度得点の順位の違いを比べて見ると，日本は精神的支援が中心であるのに対し，中国は経済的支援がより強調されていることが分かった．これは，工業化が進んだ社会では，子どもに精神的価値が求められ，農業中心の社会では経済的価値が求められるという社会変動－家族－個人の発達モデル（柏木，2003）と一致していた.

２．親孝行観尺度

親孝行観 40 項目に対して因子分析（主因子法･Promax 回転）を行い，6 因子を抽出した（表 4）．第 1 因子は，自分自身の社会的自立を親孝行と考えることから,「社会人としての自立」と命名した．第 2 因子は，親への物やお金の贈与であることから,「経済的支援」と命名した．第 3 因子は, 親と関わりたくないなど親との接触を回避する内容であることから,「親との疎遠」

表4 親孝行観のプロマックス回転後の因子パターン行列

	F1	F2	F3	F4	F5	F6
QIV35.社会的成功をしたり、社会貢献をするなど、立派な社会人になること	0.78	-0.08	-0.08	-0.05	0.02	0.10
QIV34.自分が規則正しい生活をする	0.66	-0.02	-0.13	-0.09	0.06	0.13
QIV37.結婚して孫を産む	0.66	0.05	0.09	-0.11	0.10	-0.23
QIV10.分別のある人になる	0.61	-0.01	-0.01	0.10	-0.18	0.13
QIV9.経済的に自立する	0.58	0.04	0.13	0.09	-0.26	-0.01
QIV39.両親がしてくれたことを自分の子どもに対してもやってあげる	0.57	0.04	-0.04	-0.07	0.14	0.04
QIV6.ちゃんと就職する	0.53	-0.05	0.20	0.14	-0.20	-0.12
QIV36.自分が親より幸せになる	0.52	-0.09	0.06	-0.21	0.16	-0.11
QIV40.親の社会的評価を下げないようなこと	0.49	0.05	-0.23	0.16	0.17	0.14
QIV7.出世する	0.44	0.11	0.05	0.22	0.09	-0.13
QIV21.親が言わなくても、ちょっと高級な洋服などを買ってあげる	-0.04	0.95	0.01	-0.05	0.05	-0.08
QIV22.親が言わなくても、新型の家電製品、冷蔵庫などを買ってあげる	-0.03	0.92	0.01	-0.02	0.01	-0.03
QIV20.親が言わなくても、日用品を買ってあげる	0.08	0.81	-0.06	-0.01	-0.05	0.08
QIV19.親が欲しいと言った物は値段を気にせず、買ってあげる	-0.11	0.62	0.17	0.08	-0.02	-0.04
QIV30.年末のボーナスは親にあげる、または親のために使う	0.15	0.46	-0.17	-0.02	-0.09	0.11
QIV15.親のことを嫌う	0.03	0.04	0.82	0.02	0.03	0.07
QIV16.親と関わらない	-0.05	0.04	0.79	0.04	0.12	0.17
QIV14.親のことを気遣わない	0.10	-0.09	0.55	-0.15	-0.06	-0.15
QIV4.親を無視するなど虐待のようなこと	-0.02	0.00	0.50	0.02	0.07	-0.01
QIV1.親のいうことを聞く、しつけに従う	0.00	-0.03	-0.02	0.83	0.05	-0.02
QIV2.親が言ったことに背かない	-0.07	0.04	0.02	0.68	0.05	-0.11
QIV24.社会人になっても、親から自分のマンションの頭金やローンを出してもらう	-0.05	-0.03	0.09	0.09	0.63	0.12
QIV26.社会人になっても、親と同居している場合、または近所に住んでいる場合、親に身の周りの家事をやってもらう	-0.03	-0.01	0.17	0.09	0.56	0.03
QIV38.定年後の親に、自分の子の育児をやってもらう	0.20	0.01	-0.02	-0.04	0.53	-0.13
QIV17.自殺など自分の原因で親より早く死ぬ	0.06	0.02	0.41	-0.08	-0.02	0.60
QIV18.事故など自分がコントロールできない原因で親より早く死ぬ	0.01	-0.02	-0.01	-0.07	0.01	0.58

因子 間相関	F1	F2	F3	F4	F5
F2	0.18				
F3	-0.05	-0.43			
F4	0.26	0.52	-0.30		
F5	-0.24	0.24	-0.14	-0.02	
F6	-0.31	0.17	0.04	0.13	0.34

F1：社会人としての自立(α＝.84)　F2：経済的支援(α＝.87)　F3：親との疎遠(α＝.74)
F4：親への従順(α＝.75)　F5：親への依存(α＝.57)　F6：親より先に死ぬ(α＝.57)

と命名した．第 4 因子は，親に従うという内容であることから，「親への従順」と命名した．第 5 因子は，社会人になった後も親に負担をかけるという内容であることから，「親への依存」と命名した．第 6 因子は，自殺や事故などで親より先に死亡するであることから，「親より先に死ぬ」と命名した．各因子に .40 以上の負荷量を示した項目の α 係数を算出したところ，いずれの尺度も内的一貫性を有していることが確認された．

この尺度の回答形式は，“1．とても親不孝と思う　2．やや親不孝と思う　3．どちらとも言

えない　4. やや親孝行と思う　5. とても親孝行と思う”の5件法である．各尺度得点の平均値（図2）からみると，「社会人としての自立」「経済的支援」「親への従順」は，点数が高いほどより親孝行だと考え，“親孝行”を意味する因子である．「親との疎遠」「親への依存」「親より先に死ぬ」は，点数が低いほどより親不孝だと考えることから，“親不孝”を意味する因子である．つまりどの因子も，得点が高いほど親孝行（親不孝ではない）と考えることを意味する．

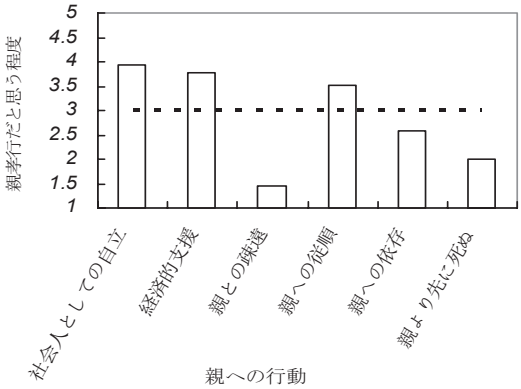

図2 親孝行観

従来の老親扶養，親孝行の研究では，親孝行観のみに焦点を当てられ，親不孝は扱われなかった．しかし，自由記述を見たところ，中国人が親孝行と考えていた“定年後の親に，自分の子の育児をやってもらう”項目が日本人としては親不孝と考えていることが分かった．このように，どんなことが親孝行や親不孝になるかは文化によって違いがあるため，本研究では親不孝についても検討することにした．

表5 親孝行観の基本統計量および2要因分散分析の結果

従属変数	国籍	性別 男女	性別 男性	性別 女性	F値(1，604) 国	F値(1，604) 性別	F値(1，604) 交互作用
社会人としての自立	中国	3.84(.51)	3.77(.54)	3.87(.49)	28.49***	5.33*	0.00
	日本	4.07(.47)	4.01(.51)	4.10(.44)			
経済的支援	中国	4.04(.48)	3.96(.51)	4.09(.46)	191.03***	8.05**	0.00
	日本	3.40(.62)	3.31(.61)	3.44(.63)			
親との疎遠	中国	1.16(.28)	1.17(.29)	1.15(.27)	307.89***	12.30***	9.88**
	日本	1.83(.66)	2.02(.70)	1.75(.63)			
親への従順	中国	3.71(.60)	3.62(.65)	3.77(.56)	79.75***	12.57***	0.63
	日本	3.27(.61)	3.12(.62)	3.34(.59)			
親への依存	中国	2.76(.47)	2.81(.54)	2.73(.42)	50.78***	20.56***	7.37**
	日本	2.37(.65)	2.60(.73)	2.26(.59)			
親より先に死ぬ	中国	2.02(.57)	1.95(.62)	2.07(.54)	1.16	1.66	0.33
	日本	1.95(.87)	1.92(.97)	1.96(.82)			

( )内はSD　　* p<.05　** p<.01　*** p<.001

表6 交互作用が有意であったものの下位検定結果

従属変数	国要因F(1，604) 男性	国要因F(1，604) 女性	性別要因F(1，604) 中国	性別要因F(1，604) 日本
親との疎遠	161.00***	154.70***	0.08	18.47***
親への依存	7.32**	72.20***	2.06	21.95***

( )内はSD　　** p<.01　*** p<.001

日中間の差及び性差を検討するため2要因分散分析を行い，交互作用のあったものには下位検定を行った（表5，表6）．“親孝行”に関する因子では，「社会人としての自立」について，国と性別の主効果が認められ，日本は中国より，女性は男性より得点が有意に高かった．「経済的支援」と「親への従順」については，国と性別の主効果が認められ，中国は日本より，女性は男性より得点が有意に高かった．“親不孝”に関する因子では，「親との疎遠」について，

有意な交互作用が認められた．単純主効果を分析したところ，国の要因は，男女ともに有意であり，中国が日本よりも得点が低かった．性別の要因は，日本で有意であり，女性は男性よりも得点が低かった．「親への依存」については，有意な交互作用が認められた．単純主効果を分析したところ，国の要因は，男女ともに有意であり，日本が中国よりも得点が低かった．性別の要因は，日本で有意であり，女性は男性よりも得点が低かった．「親より先に死ぬ」では，有意差が見られなかった．

上述のように，中国は経済的支援や家族間の繋がりを親孝行として重視するのに対し，日本は子ども自身の自立や自律を親孝行と考えることが示された．これは農業中心の社会では，親への従順や世代間の相互依存が社会化の軸となるが，工業化の進んだ社会では，自立や自律が社会化の軸となるという社会変動－家族－個人の発達モデル（柏木，2003）と一致していた．

３．伝統的文化への接触尺度

伝統的文化への接触 10 項目に対して因子分析（主因子法）を行ったところ，固有値が 1.0 以上の 2 因子は解釈困難であり，第 1 因子の寄与率も約 57％と高かった．そこで，これら 10 項目で主成分分析を行ったところ，全ての項目の因子負荷量が .45 以上の 1 因子を抽出し，α係数も .91 と充分高かった，これら 10 項目を足し合わせ 10 で割った値を「伝統的文化接触」得点とした（表 7）．

表7 伝統的文化への接触の平均値と標準偏差

	M	SD
QV1. おおみそか、お正月は、祖父母を中心に親戚、家族が集まる	3.44	0.93
QV2. お彼岸は家族全員でお墓参りに行く	3.15	0.95
QV3. 亡くなった家族は自分たちの守り神だと感じる	2.99	0.99
QV4. 中高の教科書に、親孝行をテーマ/内容にした文章	3.08	0.96
QV5. 学校で、先生から親孝行しようと言われたこと	3.25	0.95
QV6. 親孝行をテーマ/内容にしたドラマを見たこと	3.13	0.89
QV7. 親孝行をテーマ/内容にした映画を見たこと	3.03	0.94
QV8. 親孝行をテーマ/内容にしたCM(例えば、○○を親に買ってあげる)を見たこと	3.17	0.89
QV9. 親孝行をテーマ/内容にした歌(例えば、実家に帰る)を聞いたこと	3.09	0.91
QV10. 小さい頃、親から、“大きくなったら、自分(親)に○○をしてね”と言われたこと	2.85	0.99

α =. 908

日中間の差及び性差を検討するため 2 要因分散分析を行ったところ, 国の主効果が認められ, 中国は日本より得点が有意に高かった（$F(1, 604)=637.90p<$）．性別の主効果は認められなかった（図 3）．そのことから, 中国の大学生はより伝統的文化への接触頻度が高いことが示された．それは，孝に関する伝統的文化が中国人の生活にありふれたものであり，政府の政策も孝に対

して積極的であるからである．このことが中国の大学生が孝を中心とする親孝行観をより強く持つことと関連すると考えられる．

4．家族の一体感尺度

家族の一体感 10 項目に対して因子分析（主因子法）を行い，固有値が 1.0 以上の 2 因子を抽出したが，第 1 因子の寄与率が 42％と高く解釈も困難であったことから 1 因子構造と判断した（表 8）．10 項目の α 係数は .840 と充分に高かった．10 項目の平均値を「家族の一体感」得点と呼ぶこととする．

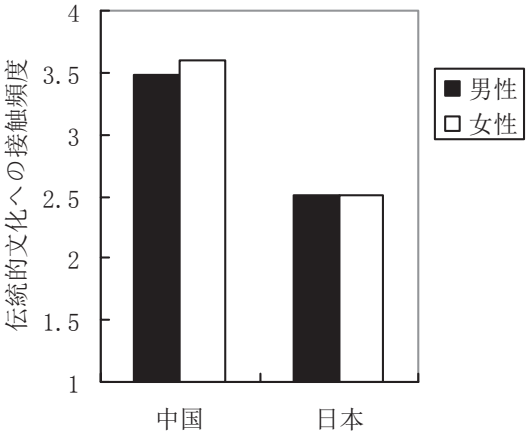

図 3　伝統的文化への接触

表8 家族の一体感の平均値と標準偏差

	M	SD
QVI1. A：自分の意見を主張する B：家族の意見に合わせる	2.31	0.82
QVI2. A：自分の考え方は、家族に批判されても、簡単に変わらないことが多い B：家族の期待にそうように、自分の考え方を合わせることが多い	2.34	0.86
QVI3. A：自分の気持ちに正直な態度をとる B：家族に合わせた態度をとる	2.02	0.83
QVI4. A：どのようにしたら、自分の能力を生かせるかを、第 1 に考える B：どのようにしたら、家族から期待された役割を果たせるか、第 1 に考える	2.11	0.84
QVI5. A：家族の反対を受けても、自分の望むことは実行する B：家族の反対を受ければ、自分の望むことは抑える	2.25	0.81
QVI6. A：家族の反対を受けても、自分の志は貫くことが多い B：家族の反対を受ければ、自分の志をあきらめることが多い	2.24	0.79
QVI7. A：家族が望むことよりは、自分らしさを発揮する B：家族が自分に望むことをする	2.09	0.80
QVI8. A：どのようにしたら、自分の能力を最大限に発揮できるかを、第 1 に考える B：どのようにしたら、家族に喜んでもらえるかを、第 1 に考える	2.24	0.86
QVI9. A：自分の価値判断に基づいて行動する B：家族の価値判断を考慮に入れて行動する	2.49	0.91
QVI10.A：日ごろ、物事を決める時は、自分 1 人の判断と責任によって決めることが多い B：日ごろ、物事を決める時は、家族に相談してから決めることが多い	2.61	0.92

α=.840

日中間の差及び性差を検討するため 2 要因分散分析を行い，国と性別の主効果が認められ，中国は日本より，女性は男性より得点が有意に高かった（表 9）．そのことから，中国の大学生は日本より家族の一体感を感じていることが示された．それは，産業の進展に伴い，家族間の人間関係は，相互依存的関係から，独立的関係に変化するという社会変動－家族－個人の発達モデル（柏木，2003）が示した家族関係の変化とも一致した．

表9　家族の一体感の基本統計量および2要因分散分析の結果

従属変数	国籍	性別 男女	男性	女性	F値(1，604) 国	性別	交互作用
家族の一体感	中国	2.36(.49)	2.22(.56)	2.44(.43)	18.88***	9.99**	2.95
	日本	2.15(.58)	2.10(.63)	2.17(.55)			

( )内はSD　　** p<.01　*** p<.001

5．親への感謝の気持ちに関する尺度

親への感謝の気持ちに関する7項目は永田ら（2007）作成した“母と娘の絆”尺度の第1因子「感謝の念」を参考に作成したものである．本研究についても，この7項目のα係数が.840と充分高いことから，今後は1因子「親への感謝の気持ち」として分析を行う．

日中間及び性差を検討するため2要因分散分析を行った．有意な交互作用が認められたため，単純主効果を分析したところ，国の要因は，男女ともに有意であり，中国が日本よりも得点が高かった．性別の要因は，日本で有意であり，女性は男性よりも得点が高かった（図4）．そのことから，中国の大学生がより親への感謝の気持ちを持っていることが示された．それは中国の儒教思想の影響や孝文化環境と関連があると考えられ，また近年の感恩教育（どういう場合に恩を感じるかについての教育）が重視された事も関係があると考えられる．つまり，感謝という個人レベルの感情も，文化と密接に関連しているといえる．

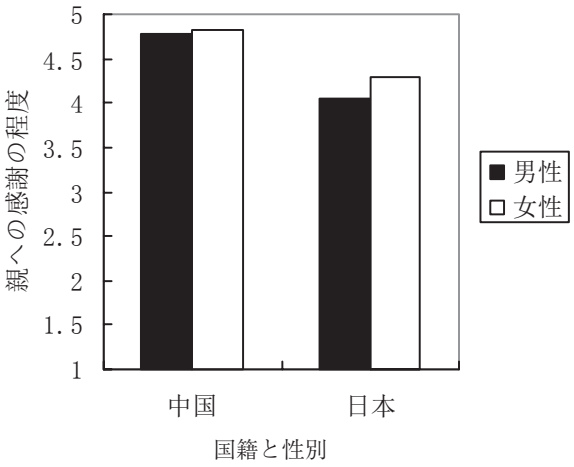

図4　親への感謝の気持ち

6．親子関係尺度

親子関係3項目は若原（2003）作成した“親子関係尺度”の親への態度尺度を参考に作成したものである．本研究では，3項目得点の平均値を「親子関係」得点と呼ぶ．

日中間の差及び性差を検討するため2要因分散分析を行ったところ，日中間と性別の主効果が認められ，中国は日本より（F(1，604)=48.86p<.001），女性は男性より（F(1，604)=22.86p<.001）得点が有意に高かった．このことから，中国の大学生は日本より親密な親子関係にあることが示された．しかし，中国人について，「伝統的文化への接触」および「親への支援行動」の尺度得点と比べると，「親子関係」は平均値が低く，SDが大きい．「伝統的文化への接触」および「親への支援行動」は文化的影響が大きいと考えられることから，親子関係の結果は文化的影響が小さく，より個人レベルの関係性を反映したものと考えられる．

7．親への支援行動と親孝行観の関連

親への支援行動とどのような「親孝行観」が対応するかを相関の有無から検討した．その結

果,「経済的支援行動」は「経済的支援」と,「家族の絆を強める」は「親との疎遠」と,「一人前になる」は「社会人としての自立」と，それぞれ正の相関がみられた．このことから，それらの間には対応関係があるものと解釈できる．日中間でそれらの相関係数を比較すると，中国はいずれの対応する因子間にも弱い相関しか見られなかったが，日本では全般的に中国より強い相関関係が見られた.

この関連を明確するために重回帰分析を行った（表 10）.「経済的支援行動」についてみると，日中ともに「経済的支援」から正の影響を受けていたが，日本の方が「経済的支援」から中国より強い正の影響を受けていた.「家族の絆を強める」についてみると，中国は「親への従順」から弱い正の影響を受けていたが，日本では「社会人としての自立」から正の影響を受け,「親との疎遠」から負の影響を受けていた.「一人前になる」は，日本のみ「社会人としての自立」から強い正の影響を受けていた．要するに，日本は各対応する因子間に関連がみられたのに対し，中国は経済的支援のみ支援行動と親孝行観との関係がみられた．つまり，日本の大学生における親への支援行動は個人がどのような親孝行観を持っているのかに左右されるのに対し，中国では経済的支援以外の支援行動は個人の親孝行観以外の要因と関連することが示された.

表10 親への支援行動を目的変数、親孝行観を説明変数とする重回帰分析（国別）

支援行動	経済的支援行動		家族の絆を強める		親との時間の共有		親の面子を立てる		一人前になる	
親孝行観	中国	日本	中国	日本	中国	日本	中国	日本	中国	日本
社会人としての自立	-.08	.17**	.04	.40***	.01	.19**	.11	.28***	.03	.41***
経済的支援	.26***	.37***	.12	.13*	.20**	.26***	.01	.11	.08	.02
親との疎遠	-.19***	.04	.07	.15*	.16**	.11	.08	.08	.04	.06
親への従順	.02	.06	.14*	.06	.12*	.07	.11	.12	.08	.01
親への依存	.07	.05	.02	.04	.07	.10	.06	.00	.07	.02
親より先に死ぬ	.04	.02	.09	.12*	.13*	.03	.11*	.06	.10	.07
説明率(R2)	.13***	.23***	.07***	.30***	.16***	.17***	.08***	.13***	.05**	.17***

表中の数値は標準偏回帰係数を示し、□ は対応因子の関連を示す　　＊ p< .05　** p< .01　*** p<.001

表11 親への支援行動を目的変数、関連要因を説明変数とする重回帰分析（国別）

	経済的支援行動		家族の絆を強める		親との時間の共有		親の面子を立てる		一人前になる	
関連要因	中国	日本	中国	日本	中国	日本	中国	日本	中国	日本
伝統的文化への接触	.23***	.26***	.28***	.17**	.26***	.28***	.22***	.17*	.16**	.20**
家族の一体感	.10	.14*	.07	.02	.13*	.19***	-.07	.01	.01	-.10
親への感謝の気持ち	.11	.29***	.05	.44***	.05	.27***	.08	.14	.08	.06
親子関係	.13*	.00	.16**	.20**	.23***	.19**	.02	-.07	.14*	.03
説明率(R2)	.14***	.25***	.15***	.46***	.19***	.43***	.07***	.05**	.08***	.06**

表中の数値は標準偏回帰係数を示す　　＊ p< .05　** p< .01　*** p<.001

8. 親への支援行動と親孝行観以外の要因の関連

そこで，親への支援行動と関わる親孝行観以外の要因（「伝統的文化への接触」「家族の一体感」「親への感謝の気持ち」「親子関係」）との関連を検討した．親への支援行動とそれらの要因の相関は，いずれも「伝統的文化への接触」との相関が最も強く，次に関連が強かったのは「親への感謝の気持ち」「親子関係」だった．日中間で相関係数を比較すると，日本では全般的に中国より強い相関関係が見られた.

さらに，この関係を明確するため，重回帰分析を行ったところ（表 11），中国は親への支援行動の各因子ともに「伝統的文化への接触」からの影響が最も強かった．それに対し，日本では，「経済的支援行動」「家族の絆を強める」「親との時間の共有」の 3 因子は「親への感謝の気持ち」という個人的な感情からの影響が強かった．つまり，中国の親への支援行動は規範に

基づくものであるのに対し，日本では，規範より個人的感情が重要であることが推察された．

今後の課題

社会変動－家族－個人の発達モデル（柏木，2003）では，中心的産業の違いが子どもに期待する価値の違いと繋がることが示されており，農業中心の社会では，実用的価値，工業中心の社会では，精神的価値が期待される．その結果，子どもは親の期待に応えるべく，工業化の進展した日本は中国より精神的親孝行が中心になることが本研究から明らかにされた．しかし，中国は国土が広く，経済力や社会進展の地域差が極めて高い，このことから，中国の中の親孝行観や親への支援行動などは地域により違いがあると考えられる．先行研究でも，中国の農村と都市の親が子どもに対する期待が違うと言われ，農村の親は老後の生活を子に頼り，子どもへの経済的期待が高いのに対し，都市部の親はより精神的な期待を求めている（李ら，2011；彭ら，2010;韓，2009）．本研究での中国の調査対象の大学生は中国東部の沿海部出身が多かったため，地域差の比較ができなかった．今後の調査では，中国内部や日本内部の地域差について検討していく．

引用文献

萩原清子　2009　高齢者虐待の発生と親孝行文化　関東学院大学文学部紀要 ,114，127-146

韓　海錦　2009　中国の大学生の親扶養意識に関する研究：家族満足度・きょうだい数・性別との関連　九州大学心理学研究，10，185‐189

細江容子　1987　親の老後に対する大学生の扶養意識　老年社会科学，9，96‐108

池田幸恭　2006　青年期における母親に対する感謝の心理状態の分析　教育心理学研究，54，487‐497

池田幸恭・大竹裕子・落合良行　2006 「子の親に対するかかわり方」からみた心理的離乳への過程仮説　筑波大学心理学研究，31，45‐57

Kăgitçibaşi，C．1989　Family and socialization in cross-cultural perspective: A model of change, In Berry, J.W., Draguns, J.G. &Cole, M., *Nebraska Symposium on Motivation 1989 Cross-Cultural Perspectives*, 135‐200

柏木恵子　2003　家族心理学―社会変動 • 発達 • ジェンダーの視点　東京大学出版会，21 － 56，163‐170

柏木恵子　2006　老年期の親と中年期の子ども：柏木恵子 • 大野祥子 • 平山順子　家族心理学への招待　ミネルヴァ書房，171‐176

柏木恵子　2010　よくわかる家族心理学　ミネルヴァ書房，162‐165

北山　忍　1997　文化心理学とは何か：柏木恵子 • 北山忍 • 東洋　文化心理学－理論と実証　東京大学主版会，17 － 43

北山　忍　1998　自己と感情　－文化心理学による問いかけ－　共立出版

木内亜紀　1995　独立 • 相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性 • 妥当性の検討　心理学研究，66，100‐106

李　琬予・寇　彧　2011　孝道信念の形成と発達：親子関係の文化差の視点から　心理科学の発達，

19(7)，1069‐1075
毎日新聞社人口問題調査会　2000　日本の人口：戦後 50 年の軌跡　全国家族計画世論調査第 1 回～第 25 回調査結果
Markus, H.R.,& Kitayama, S.　1991　Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98,224 ‐ 253
増本康平・森田敬史・渡辺美那子・王　健　2001　現代青年の扶養意識に関する研究　臨床死生学年報，6，21 ‐ 28
永田忠夫・新美明夫・松尾貴司　2007　初期成人期にある娘とその母親との関係－母娘システムとしての分析－　家族心理学研究，21，31‐44
西平直喜　1990　成人になること：生育史心理学から　東京大学出版会
小高　恵　1998　青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究　教育心理学研究，46，333‐342
小高　恵　2008　青年の親への態度についての発達的変化：心理的離乳過程のモデルの提案　太成学院大学，10，31‐48
太田美緒・甲斐一郎　2002　老親扶養義務感尺度の開発　社会福祉学，42，130‐138
落合良行・佐藤有耕　1996　親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析　教育心理学研究，44，11 ‐ 22
彭　華茂・尹　述飛　2010　都市部および農村の空巣老人における親子関係と鬱屈の関連　心理発達と教育，6，627‐633
酒向一次　1994　現代親孝行考：家族介護から社会的介護へ　東海女子大学紀要，14，141-175
若原まどか　2003　青年が認識する親への愛情や尊敬と，同一視および充実感との関連　発達心理学研究，14，39‐50
厳　建雯・陳　伝鋒・Mike Murphy　2005　わが国の高齢者におけるソーシャルサポートについて　心理科学，28(6)，1497‐1499
楊　昌江　2006　“孝文化”の現代化問題ついて　湖北社会科学，4，132－133
楊　国枢　1984　中国人における孝道概念の分析　伝統文化と現代化生活に関する学会論文集，159 ‐ 174
尹　靖水・嚴　基郁・金　貞淑・黒木保博・中嶋和夫　2009　東アジア地域用老親扶養意識測定尺度の開発　評論・社会科学，87，51‐69
張　坤・張　文新　2004　青少年における伝統孝道の態度に関する研究　心理科学，27(6)，1317‐1321

（2012.9.26 受稿，2012.10.31 受理）